



特集
建築のまちを旅する
13

富山

立山連峰のもとに
治水と利水から生まれた水の都



表紙の写真

〈富山県美術館〉から 立山連峰を望む

設計 | 内藤廣建築設計事務所

市民の憩いの場として、また、県内トップの観光地として人気の高い「富山県富岩運河環水公園」西地区に立つ「富山県美術館」。公園側のファサードは一面ガラス張り、さらにそのファサードの内側は吹き抜けのホワイエで、訪れた人は公園との一体感や雄大な立山連峰の景色を楽しめる。富岩運河環水公園は、富山の治水の歴史を伝える富岩運河の船だまりを活かして整備された。水面には、公園のシンボル施設として「天門橋」が架けられている
[写真:石田 篤]

左写真

〈TOYAMAキラリ〉

設計 | RIA・隈研吾・三四五設計共同体

富山市立図書館本館や富山市ガラス美術館などが入る複合施設。中心市街地の総曲輪（そうがわ）近辺に立つ。2階から6階までは、「スパイラルボイド」と呼ばれる吹き抜け空間が螺旋状に連なり、天窓から大きな光の筒が斜めに貫く。この吹き抜けの北側に図書館、南側にガラス美術館が同じフロアに併存し、スパイラルボイドが両施設の回遊を促す。吹き抜けを取り囲む県産スギ板ルーバーが親しみやすさを感じさせる
[写真:石田 篤]

LIXIL eye no.25

2021年8月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL

編集発行人 | 早川氏幸

横申機能本部

TH統括部

〒136-8535

東京都江東区大島2-1-1

Tel: 03-6837-1646

Fax: 03-6837-1662

制作 | 株式会社フリックススタジオ

デザイン | 株式会社ラボラトリーズ

印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます

* 本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.26は、
2022年1月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。

<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 13

富山

06 テーマ1

立山連峰のもとに

治水と利水から生まれた水の都

ナビゲーター | 白井芳樹

10 富山県富岩運河環水公園 / 富岩運河水閘施設 (中島閘門) / とやま自遊館 / 富山県民共生センター サンフォルテ / 富山県美術館

14 テーマ2

まちに広まるガラス・アート

そのルーツは伝統の薬売りにあった

16 富山建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 13

エコ住宅

大島芳彦「大島邸」× 竹内昌義「山形エコタウン前明石」

32 建築家の〈遺作〉 | 10

内井昭蔵「日本基督教団信濃町教会」

談 | 横山 正

36 新世代・事務所訪問 | 13

水谷 元 / atelier HUGE

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 13

ベニアハウス

鈴木 啓

48 触覚デザイン | 10

菊竹清訓の階段手すり

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 13

虎渓用水広場

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 TOPICS

LIXIL WINGビル 新棟「HOSHI」

文 | 西村雅雄・岩瀬静雄・花多山隆士・高橋 亮・光永知仁・神 侑弥

60 INFORMATION

LIXILビジネス情報サイトのご案内 / LIXILからのご案内 / 展示のご案内

64 紙上の建築 | 13

幻想都市風景を描くわけ

光嶋裕介

富山

中心市街地が3,000m級の山並みに囲まれている風景はめったにない。
ここでは交差点を東へ曲がると、視線の先に突然壁のような高山が出現するのだ。
富山の建築というと、アルミ建材メーカーのお膝元であるとか、著名な現代建築が集中しているなど、
建築関係の人はそんなイメージをもっているかもしれない。しかし実際旅をすると印象が大きくなるのは
立山連峰と、そして運河の存在。治水とともに成長したまちは、いっとき失いかけた運河を再生し、
その周辺に建築家の英知を集めた。近年では富岩運河環水公園の整備を核に、
そのほとりに立つ富山県美術館も注目されている。
富山旅はこの運河を中心に、まちづくりの経緯を追いながら、主要な建築を訪ねてみよう。



「富山県美術館」の屋上から「富山県富岩運河環水公園」越しに、3,000m級の山々が連なる立山連峰を望む。空、山、緑、水が見事に調和した眺めが、富山の豊かな自然環境を伝えている。富岩運河は1935（昭和10）年に完成し、富山の工業化に大きく寄与。しかし、時代の変遷とともに物流が舟運からトラック輸送に代わると、運河は使われなくなって水が汚れ、一時は埋め立てて道路をつくる計画もあった。それが県の方針の大転換により、まちなかの貴重な水辺空間として生まれ変わり、いまや県内で最も人気のある場所だ [写真：石田 篤]

テーマ1

立山連峰のもとに 治水と利水から生まれた水の都

ナビゲーター | 白井芳樹 (元・富山県土木部長)

取材・文 | 長井美暁
写真 | 石田 篤 (特記以外)

「富山県美術館」や「TOYAMAキラリ」など、この数年の間に話題の建築が完成した富山市は、「神通川から誕生したまち」と言われる。神通川は富山県の七大河川のひとつで、この川の治水工事で同時に都市計画事業により開削された富岩運河は、昭和の初めに近代化の大きな一翼を担った。

また、富山県として見ると、急流かつ水量が多い川を利用して発電事業が発達した歴史も見逃せない。旧建設省から富山県に出向し、都市計画課長、土木部長として「富山県富岩運河環水公園」の整備を担当するとともに、『とやま土木物語』の著書がある白井芳樹氏と、環水公園を中心に巡った。

日本海を右手に走っていた北陸新幹線が富山県に入ると、大きな川を次々に渡っていく。順に黒部川、片貝川、早月川、常願寺川。どれも川幅の広さに比べて水量が少なく、河口近くなのに大きな石がゴロゴロしている。「これが富山の川の姿です。急流なので、山でまとまった雨が降れば、あっという間に川幅いっぱいが増水します」。そう話すのは、今回のナビゲーターである元・富山県土木部長の白井芳樹氏だ。

白井氏の言う「山」は、3,000m級の山々が連なる立山連峰のこと。先述の川の下流には扇状地の平野がのびやかに広がり、“天然のいけす”と名高い富山湾に至るまで、高低差4,000mのダイナミックで変化に富んだ地形が続く。明治時代に“日本近代登山の父”と呼ばれた英国人のウォルター・ウエストンは、東南西の三方を山に囲まれた平野と、北に富山湾を望むこの地形を見て、「天然の円形劇場」と表現し、その特徴を見事に捉えた。

富山駅で新幹線を降りて改札を抜けると、南北自由通路越しに路面電車の走る姿が目に入る。駅の南北でそれぞれ運行していた路面電車が、駅高架下で接続したのは2020 (令和2)年。南口には大正の初めから路面電車が走り、北口にも富山港線という鉄道が走っていた。富山港線は2006 (平成18)年に路面電車化され、2015 (平成27)年の北陸新幹線開通で駅が高架化したのち、路面電車の南北接続事業が進められてきた。この接続により、鉄道の改札から

駅舎を出ることなく路面電車に乗り換えられるようになり、駅の利便性がぐんと増した。白井氏は「南北の接続によって、他の都市には見られない駅の光景が生まれました。駅周辺を一大交通拠点として整備するのは、富山に路面電車が走り始めてから数えれば、実に100年がかりの大事業です」と語る。

運河を開削し、その掘削土砂で 廃川地を埋め立てる

今回の旅の一番のお目当てである「富山県富岩運河環水公園」⁰¹は駅の北側にあり、駅から歩いて10分もかからない。北口からは幅60mのブルバール⁰²が延びる。西側の歩道はなんと幅が30m。ケヤキの3列並木が続き、花壇なども連続的に配して広場の要素をもたせていて、気持ちよく歩ける。終点では西へ幅40mの親水広場がつながり、その先に富岩運河環水公園が見える。

富岩運河環水公園は「富岩運河」の船だまりを活用して整備され、1997 (平成9)年に一部開園、2011 (平成23)年に全面開園した。富岩運河が誕生したのは1935 (昭和10)年。富山県の七大河川のひとつで富山市の中心部を流れる神通川は、かつては富山城の北側で大きく蛇行していたため氾濫することが多く、市街地は頻繁に浸水の被害に遭っていた。県は1901 (明治34)年からの改修で、川の西に洪水を流す馳越線を建設した。ところが、普段の水も馳越線を流れるようになり、その結果、旧河道(廃川地)が市街地を分断するかたちで残った。

そこで、県は工業化施策の一環として運河を計

神通川の変遷

明治期までの神通川は、市の中心部、富山城の北で大きく蛇行して流れており、洪水時にはこの箇所できよくあふれた。このため県は1901 (明治34)年から、洪水を流すため蛇行区間の西側に真っ直ぐな河道(馳越線)といった)を建設した。いまの富山大橋から富山赤十字病院付近までの区間だ。工事は、川の中央に幅2m、深さ1.5mの細い水路を掘り、洪水の力を利用して、少しずつ水路の幅を広げていく方法を採用した。しかし水害は治まらず、下流に土砂がたまり東岩瀬港が使えなくなるなどの問題が生じた



明治初年の神通川と橋北
【出典：『神通川とその流域史』】



昭和初年の神通川と富山市街
【出典：『神通川とその流域史』】

画。その掘削土砂で33万坪に及ぶ廃川地を埋め立てて区画整理し、あわせて関連する街路7路線を建設するという都市計画を立案した。運河は着工の5年後に完成。東岩瀬港(現・富山港)から駅北までの約5kmが水路でつながり、運河沿岸は一大臨港工業地帯を形成していく。

1918 (大正7)年から国による神通川の改修工事が始まり、神通川と東岩瀬港の分離工事も行われた。それまでの東岩瀬港は神通川と一体の河口港で、馳越線工事の結果、上流から流れてくる土砂の堆積が一層進んだ。そのため以前は積み荷のまま港に入れた船が、沖合に停泊して船で荷物を運ばなければならなくなった。そこで神通川の流れを西側へ付け替える工事を行い、もとの河口をそっくりそのまま港に充てることにした。

富岩運河の建設で特筆すべきは、「運河掘削事業と廃川地埋立て事業という2つの一般土木事業を、都市計画により関係づけて同時に実施したことです」と白井氏は言う。昭和の初め、富山の土木には3つの課題があった。まず、明治の治水の“負の遺産”である神通川の廃川地を活用して近代都市をつくること。次に、東岩瀬港の整備。近代港湾にふさわしいものとして3,000トン級の船が接岸できる岸壁の整備が急務となっていた。

そして、豊富で低廉な電力を背景に東岩瀬港の周辺に一大工業地帯を形成すること。大正期に始まった常願寺川での県営電気事業をはじめ、県内の水力発電は昭和に入り、さらに進展を続けていた。「当時、電力が安い富山には関西方面から多くの企業が進出していました。その工場を受け入れていた高岡の伏木港周辺がいっぱいになり、神通川の改修と一緒に東岩瀬港も、となったのです」。

富岩運河によって、鉄道駅との間に舟運の便が拓かれ、沿岸に工場の立地を促すことができる。掘削土砂の大半を用いて神通川廃川地を埋め立てて造成し、一部を東岩瀬港の岸壁・埠頭用地の造成に充てられる。富岩運河の開削は、3つの課題を

一挙に解決する「一石三鳥の事業」だった。ところで、富岩運河の中間に「中島閘門⁰³」がある。運河の上流から港へと地形に沿って掘削すると神通川のように急勾配、つまり急流になって沿線の工場への荷さばきができないため、閘門を設けてその上下流の水面の勾配を小さくしたのだ。

破綻寸前の財政を救った 県営電気事業

富山県は1920 (大正9)年から県営電気事業を始めた。県の財政を立て直すためだ。県内ではしばしば神通川や常願寺川などが氾濫を起こし、堤防が決壊していた。復旧しても、また同じことが起こる。1891 (明治24)年の県の決算を見ると87%が土木費で、その大半を水害の復旧費が占めていた。しかし、税金を上げるわけにもいかない。県債がどんどんかさみ、富山県はこのままいくと財政が破綻するのではないかと新聞に揶揄されるほどだった。

そこで目をつけたのが電気事業だ。そのころすでに民間企業が神通川の上流で電気事業を始めていた。川は急流、水は豊富、誰が見ても発電に向いている。「当時の知事がよく決断したし、県議会もよく承認したと思いますが、年間の県予算が300万円くらいの時代に、2,000万円の事業計画を立てたのです。しかも、全額県債すなわち借金で、実質的な審議期間はわずか2日だったという。反対する議員も代案がない。現状を打破するために、これにかけようという、相当な覚悟を感じます」。

1924 (大正13)年に最初の県営発電所3カ所が運転を開始。その後は毎年借金を返しながら、1930 (昭和5)年ごろには少し余裕が出てきて利益の一部を県の一般会計に充当することができるようになった。多いときは県予算の5~6%を占めるようになり、「金額にすれば年間80万か90万円くらい。県庁舎(1935年)や富山大橋(1936年)などは電気事業の利益でつくったと言えるかもしれません。実際に当時



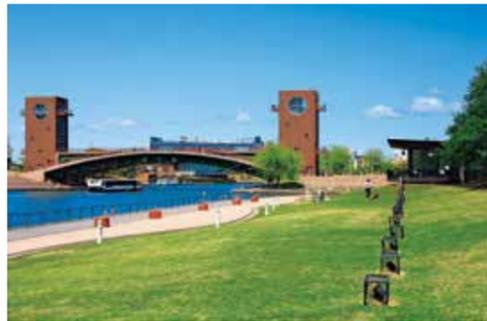
都心土地区画整理と富岩運河
【出典：『都市公論：運河・街路及び土地区画整理事業の実施について』昭和11年5月1日第19巻第5号】

02 | ブールバール

フランス語で、街路樹や側道を備えた広い道路の意味

03 | 富岩運河水開施設 (中島閘門)

富岩運河の中流部に、運河の中核施設として1934 (昭和9)年につくられた。パナマ運河方式で、2.5mの水位差を上下流2対の扉で調整する。復元にあたっては、約1万5000本のリベット打ちにより接合された普通鋼の門扉を製作するなどして、建設当時の姿に戻した。国の重要文化財





08 | 親水広場

プールパールの終点付近から西方向を見る。広さ約1万㎡の「親水広場」を挟んで左手に「富山市総合体育館」、右手に「とやま自遊館」が立つ。特にデザインコードはなかったが、アースカラーで統一されている



09 | 富山県民共生センター サンフォルテ

地上4階建てで、2階の交流サロンは写真のように、環水公園に面して曲面ガラスを大きく使用。室内から豊かな水辺空間の景色を楽しめる。館内には他にホールや研修室、調理実習室などがある。詳細11ページ



10 | 富山市総合体育館

旧富山市体育館を建て替えるかたちで移転・新築。地下1階・地上3階建て。設計は山下設計。1999（平成11）年に完成し、翌年開催された富山国体では屋内競技の主会場となった。2階の1周300mのランニングコースは、環水公園に面して曲面ガラスを多用し、公園との一体感を強めている



12 | 富山港展望台

1985（昭和60）年に完成。形状は、海の守護神として船方衆に崇められた岩瀬荒木町にある金刀比羅社の「常夜燈」がモデル。「常夜燈」は、北前船の時代には灯台の役目を果たしていたといわれ、船の安全と港の繁栄を願ったデザインだ。高さ20mの展望台からは、富山港と岩瀬のまち並みを一望できる

04 | 中沖 豊

政治家、元・富山県知事（1927–2018）。富山市出身。東京大学法学部卒業後、地方自治庁（のちの自治省、現在の総務省）に入庁。1980（昭和55）年から富山県知事を6期24年務めた。北陸新幹線の整備に力を注ぎ、「ミスター新幹線」と呼ばれた

05 | とやま都市MIRAI計画

1985（昭和60）年に旧建設省で創設された「新都市拠点整備事業」を導入し、21世紀に向けたまちづくり計画として1988（昭和63）年に策定。この計画に基づき、「富山駅北土地区画整理事業」「富岩運河環水公園」「富山駅北線（プールパール）」「親水広場」などの都市基盤施設をはじめ、公共公益施設や民間施設が計画的に整備された

06 | 仙田 満

建築家（1941–）。東京工業大学を卒業後、菊竹清訓建築設計事務所を経て、環境デザイン研究所を設立。1997（平成9）年、「愛知県児童総合センター」で日本建築学会賞（作品）、2013（平成25）年、「地球環境、こどもの育成環境等における環境デザインの研究、設計、教育、社会活動に対する貢献」により日本建築学会大賞を受賞



07 | 牛島閘門

1934（昭和9）年に富岩運河といたち川（旧松川）間の水位調整のために設けられた小ぶりの閘門。2001（平成13）年に、現存しなかった門扉を昭和初期の写真をもとに建設当時と同じ木製で製作するなどして復元した。国の登録有形文化財

の人は、富山大橋は県電事業で架けたと言っていたそうです」と白井氏。1935（昭和10）年ごろには、全国の県営電気のなかで発電規模や県財政への貢献の度合いが最大になるなど、トップクラスを誇っていた。しかし、第二次世界大戦が始まると、県営電気事業はすべて国策会社に召し上げられた。

白井氏は「治水と利水はコインの表と裏のようなものなんです」と語る。暴れ川を治めれば、農地に水を安定的に引けるようになる。また、富山の川は水量が多く急流だから高低差が簡単にとれて電力を得やすい。それほど山奥に入らなくても発電所を建設でき、そのぶん工場地帯に近くなり、送電ロスが少なくなる。この豊富で安価な電力が富山の近代化・工業化の武器となった。精錬に大量の電力が必要なため、昔は「電気の缶詰」と言われたアルミ産業が富山で盛んなのも、こうした背景からだ。

埋立ての危機を免れた 富岩運河

富岩運河は昭和初期には富山の近代化の一翼を担ったが、戦後は物流がトラック輸送に代わり、ほとんど使われなくなった。その結果、水は汚れ、ヘドロが堆積し、岸辺も草がぼうぼうの状態に。そして1979（昭和54）年、中田幸吉知事が県議会で正式に埋立ての方針を表明。これを受け、運河を埋め立てたあとの利用計画の立案が進められた。

ところが中田知事が急逝し、次の中沖豊知事⁰⁴は「都市内の貴重な水面は有効に活用できないか」と考えた。水が汚いから埋め立てるというなら、水をきれいにして残せばいいではないかと言い、県は昭和50年代後半に富岩運河の埋立てを中止。白井氏はしかし、「私が1985（昭和60）年に都市計画課長に赴任し、地元の県議会議員に運河を活用する道を探りたいと言ったところ猛反発を受けました。課長は東京から来たから知らないのかもしれないけれど、市内で蚊帳を吊らないと寝られないのはこの運河周辺だけだった。ボウフラがわくほどだったんですね」と振り返る。

「中沖知事は、在るものはできるだけ残して活用する、どうしても残せないのなら新しくつくるしかないが、つくる場合はどこよりもいいものを。このように考える人でした」と言う。時代はちょうど、潤いのあるまちづくりや、水と緑を大事にしようといったことが叫ばれるようになったころだ。同じころ、県と市で駅北地区の開発計画が進められた。駅近くの大規模な未利用地と運河の広大な水面とを活用しながら、駅北地区を富山の新都市拠点として整備する

「とやま都市MIRAI計画」⁰⁵が策定された。県は、「運河の船だまりは、水面を活用した『カナルパーク』とする。単なる都市公園ではなく、新都市拠点全体のシンボルゾーンとして整備する」ことにした。1989（平成元）年、カナルパーク基本デザイン指名設計競技を実施。建築家の仙田満⁰⁶が率いる環境デザイン研究所の案が選ばれ、それを基本案として工事が進められた。「富岩運河に関しては知事も非常に熱心だったので、ことあるごとに知事に説明したし、あれはどうなっているんだと知事室に呼ばれることもしばしばでした」。

富岩運河再生・整備事業では、水漏れが激しく、利用できなくなっていた「中島閘門」を建設当時の姿に復元して利用することにした。復元工事が完成した直後の1998（平成10）年、中島閘門とその周辺一帯は国の重要文化財に指定された。昭和の土木構造物では全国初の重文指定だった。続いて「牛島閘門⁰⁷」も復元整備された。

環水公園の一部開園に前後して、公園の東側に「親水広場⁰⁸」が整備され、広場をはさんで「富山県民共生センター サンフォルテ⁰⁹」「とやま自遊館」「富山市総合体育館¹⁰」が建てられた。このとき、富山市のデザイン監修を担当した建築家の高橋志保彦¹¹をはじめ各建物の関係者は、外壁や舗装の

質感、色調を設計段階から調整。さらに環水公園と親水広場を一体的な空間とするために、仙田と高橋は同じテーブルに着き、取合いなどを調整した。

公園は県、広場は市、各建物は県・市・他と事業者は異なるが、「いいものにするために、調整は当然やらなければならないと、それぞれの担当職員は考えていました。また建築家側も同じ認識でした」と白井氏。そこには県と市に、いい意味での競争意識があった。そして「実際に調整してみたら、いいものになった。いわば実証できたので、そのやり方が引き継がれていったのだと思います」。

2004（平成16）年に中沖知事が退任。後任の石井隆一知事は中沖知事の方針を基本的に受け継いだ。さらに「環水公園は非常にいいものだから、もっとにぎわいのある空間、皆が行きたがる場所となるように考えなさい、と土木部に指示がありました。それで飲食施設や遊覧船を計画したのです」と白井氏。

「世界一美しい」との誉れ高いコーヒーチェーンの店舗が公園内にオープンしたのは2008（平成20）年だ。「人に集まってもらうためにはカフェやレストランが必要だということは当初から皆で話していたんです。それに運河だから船も走らせない。いずれも実現して本当にうれしい」。白井氏の顔がほころぶ。「インフラというのは、使ってもらってなんぼですから」。

第一に人、第二に時代、 第三にロケーション

白井氏に促され、遊覧船「富岩水上ライン」に乗って運河クルーズに出発。中島閘門の水位調整も体験できて実に楽しい。岩瀬地区に到着後は「富山港展望台¹²」へ。神通川が海に注ぐ様子を展望フロアから眺めながら、旅の締めくくりに、富山市と周辺に現代建築が充実している背景を白井氏に問うた。すると「第一に人、第二に時代、第三にロケー

ション、と言えるかもしれません」。

第一は、トップの想いだという。「公共建築にその時々首長の考えが反映されることは時代や地域を問いません。富山の場合は1980年からの40年間は中沖県政と石井県政の時代。特に中沖知事は『いいものをつくれ、そのためには優れた建築家に頼むべし』という考えで、地元的设计事務所が担当する場合も著名な建築家に監修や指導を仰ぐことが多かった。知事自身が直接・間接に磯崎新さんや内井昭蔵さん、黒川紀章さんらと知り合いだったとも聞きます。こうした知事の考えや指示のもと、職員もよく勉強しました。県がつくる主な建物は、知事の了解を得ないと前に進めなかったからです」。

白井氏が続ける。「第二は、置県以来140年の歩みを振り返ると、ほぼ50年ごとの3期に分けられます。第1期は治水と港湾・鉄道の進展、第2期は道路・橋梁と都市計画（開発）の進展、第3期は都市計画（再開発）と建築の進展。このように1980年代以降は建築の充実¹³に意と力を注ぐことが可能な状況になりました。この時期は、量的拡大より質的充実を求めるようになった時代でもありました」。

三つ目は、「建築の敷地としての条件のよさです。雄大な自然に囲まれた土地があり、これを活かせるアクセスや周辺環境が先の第2期までに整備されました。建築家たちが、この優れたロケーションを活かすべく腕をふるったことは十分に考えられるのではないのでしょうか」。

2017（平成29）年には「富山県美術館¹³」も環水公園の西側に開館した。駅北地区に一層のにぎわいをもたらすものと期待されての移転新築で、まるで「とやま都市MIRAI計画」と運河再生・整備事業の総仕上げのようだ。そして設計者はまさに「優れたロケーションを活かすべく腕をふるった」のだ。

建築のまちとしての富山は、治水と利水の歴史の延長にあることを実感する。

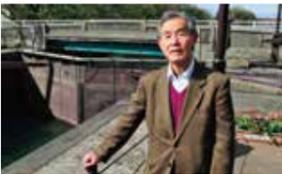
11 | 高橋志保彦

建築家、アーバンデザイナー（1936–）。早稲田大学卒業後、ハーバード大学大学院修士課程修了。竹中工務店を経て独立。1988年より神奈川大学教授。現・名誉教授。横浜の「開港広場」や「馬車道ガーデンストリート」などのデザインを手がける



13 | 富山県美術館

富山県立近代美術館の防災面の課題により、環水公園の西地区に移転新築され、2017（平成29）年に開館。設計は内藤廣建築設計事務所。「オノマトペの屋上」は佐藤卓デザイン事務所のデザイン。もともとこの地にあって子どもたちに人気だった「ふわふわドーム」を活かしている。詳細12–13ページ



中島閘門にて、白井芳樹氏 [写真：編集室]

白井芳樹 しらい・よしき

1947年香川県生まれ。1970年東京大学工学部都市工学科卒業後、建設省（現・国土交通省）に入省。1985年から1988年まで富山県土木部都市計画課長。1996年から2001年まで富山県土木部長、公営企業管理者を務める。

長井美暁 ながい・みあき

編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、「室内」編集部に所属。2006年よりフリーランス。

MAP 1 MAP 3

05 18

富山県富岩運河環水公園 富岩運河水閘施設（中島閘門）

環水公園開園 | 1997年一部開園、2011年全面開園

中島閘門竣工 | 1934年竣工、1998年復元

環水公園基本デザイン | 環境デザイン研究所 中島閘門設計 | 不詳

まちの治水の歴史を伝える親水文化公園

「富岩運河」は1935（昭和10）年につくられ、東岩瀬港後背地の工業化の促進に貢献してきたが、戦後は物流が変わり、使われなくなった。その船だまりを活かし、親水文化公園としてよみがえらせたのが「富岩運河環水公園」だ。指名設計競技で選ばれた環境デザイン研究所の基本デザインをベースに、治水の歴史を後世に伝え、富山の自然と都市が共存するものとして整備されている。

運河の静水面と水際のボードウォークや開放的な芝生斜面を基本としながら、要所に「泉と滝の広場」や「天門橋」などシンボルとなる施設を配置。天門橋の展望塔からは公園内や立山連峰が一望できる。

運河内の中島閘門や牛島閘門は復元され、中島閘門は昭和の土木構造物では全国で初めて国の重要文化財に指定された。

「環水公園」の名付け親は、当時、県の顧問を務めていた詩人の大岡信だ。立山連峰に降った雨や雪どけ水が川を下って運河から海へ、やがて雲となって雨や雪に——。この地球規模の水の循環が「環水」の2文字に込められている。

- 1 「天門橋」の両展望塔の間には長さ58mの「赤い糸電話」があり、愛の告白スポットとなっている
- 2 「中島閘門」の操作室も2010（平成22）年に復元。創建当時に忠実に、木枠の窓ガラスとした。24時間体制で管理人が住み込んで操作にあたっていた内部も見学できる
- 3 運河越しに立山連峰を望む。左手に見える四角い建屋が「世界一美しい」といわれるスターバックスコーピーの店舗。船だまりに横たわるような建造物は「泉と滝の広場」で公園の東端にあたり、隣接する親水広場と接続する部分になる



1



2



3

MAP 1

06 07

とやま自遊館 富山県民共生センター サンフォルテ

自遊館竣工 | 1996年 サンフォルテ竣工 | 1997年

設計 | 山下設計・富山県建築設計監理協同組合JV

立山連峰をモチーフとし 環水公園とも調和する外観

設置者も用途も異なるが、隣り合う2棟を一体のものとして扱い、ひとつの景観をつくっている。外装は同じ煉瓦タイルを使ったアースカラーを基調に、タイル面とガラスのカーテンウォール面とを対比させる外観デザインの手法を共有。統一感を生み出しながら、「とやま自遊館」ではメリハリの利いたダイナミックな造形を行い、「富山県民共生センター サンフォルテ」ではプレーンな造形で、この対比が両者の機能の相違を示すと同時に、ひとつの景観としてのまとまり、さらに隣接する富岩運河環水公園とも調和した景観をつくっている。

とやま自遊館の外観デザインは、立山連峰を代表とする険しい山脈や、豊かな恵みをもたらす海などをモチーフに、自然環境に恵まれた富山に立地する建物を表現。立山連峰の岩肌や、そこから流れ落ちる水をイメージし、垂直性を強調したフォルムにしている。

- 1 サンフォルテの2階からエントランスホールの方向を見る。2階に、とやま自遊館とつながる渡り廊下が設けられている
- 2 サンフォルテの2階ホールは、舞台が環水公園側にあり、舞台後ろの壁をスイッチひとつで上げられ、ホールの客席に座りながら公園の景色が楽しめるようになっている
- 3 自遊館のエントランスホール
- 4 自遊館は地上6階建て。ホールやレストランのほか、宿泊やフィットネスの機能も有する。左手前は「親水広場」で、向かいに立つ「富山市総合体育館」とともに、建築家の高橋志保彦がデザイン監修を手がけた



1



2



3



4

富山県美術館

竣工 | 2017年

設計 | 内藤廣建築設計事務所

内部からの眺めも佇まいも 環水公園との一体感を意識

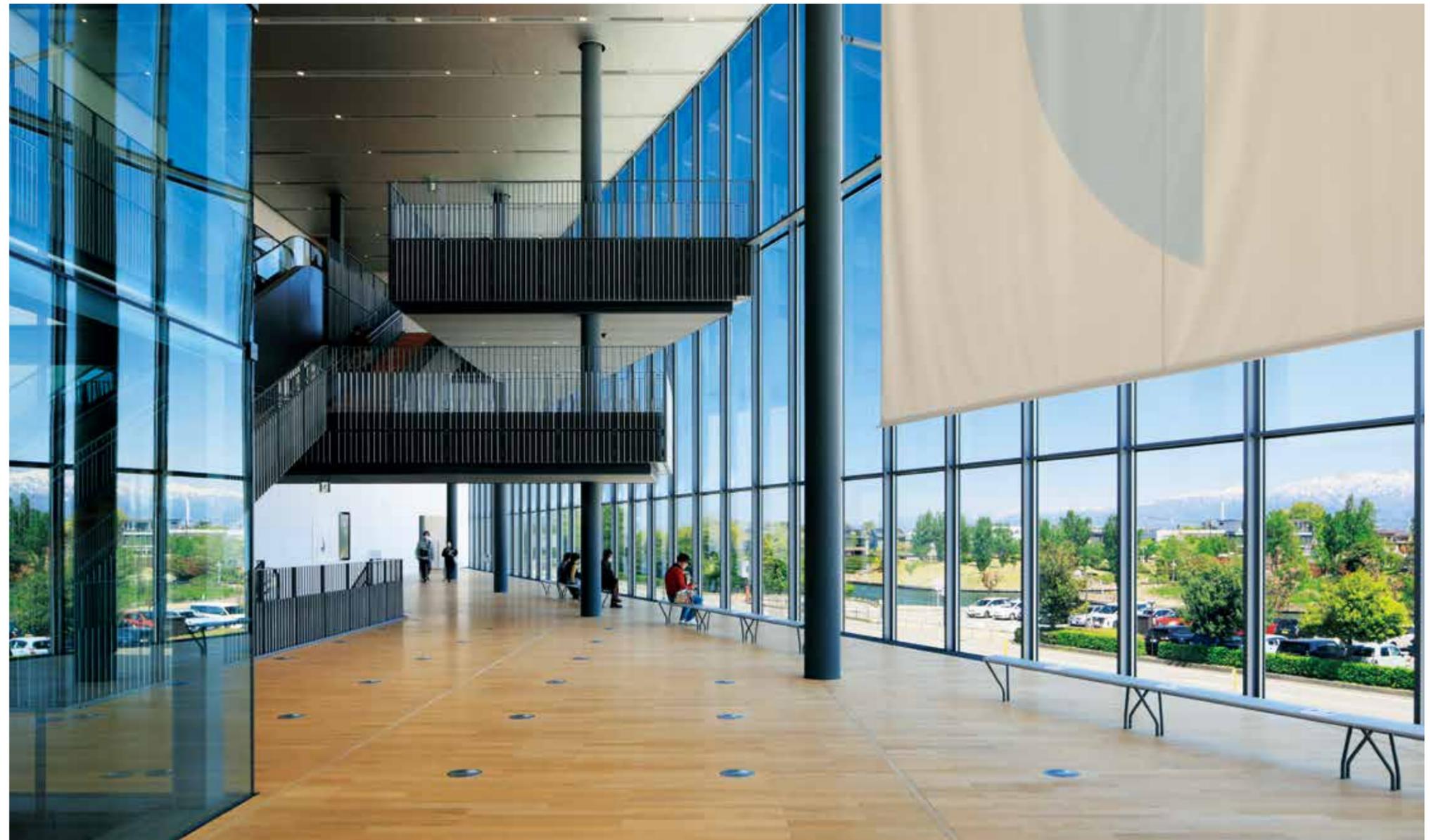
富岩運河環水公園に面する東側のファサードは一面ガラス張り。ガラスのカーテンウォールの内部は2層吹き抜けの開放的なホワイエで、正面に立山連峰を望める。プロポーザルで選ばれた設計者の内藤廣はこの美術館の立地を、「環水公園を座敷とすると、奥の床の間にあたる場所になる」と表現。「シンメトリカルな環水公園の軸線、公園を包摂するような放物線、それに抱かれるような美術館本体の楕円、この完結的な構成を断ち切るように立山に向かう切断面」を設け、建物の形状を導き出した。そのため平面は不整形だ。

地上3階建て。神通川に近い敷地の水害リスクを考慮し、展示室や収蔵庫、機械室などは2階以上に設けている。2階は建物を貫通する中央廊下に沿って、4つの展示室を分散して配置。中央廊下は富山・氷見産のスキのルーバーで天井と壁を覆っている。3階には同館ならではのデザイン分野のコレクションを見せる展示室や、富山出身の詩人・美術評論家である瀧口修造のコレクション室などがある。

また以前、この敷地に子どもの遊び場があったことにちなむ「オノマトペの屋上」は、子どもの遊具を設置した芝生の広場で、外部からも直接出入りできる。遊具は佐藤卓デザイン事務所がデザインを手がけた。

富山はアルミ産業が盛んであることから、内外装にアルミのスパンドレルなどを積極的に採用。鋳物や押し出し成型など、あらゆる技術が使われている。

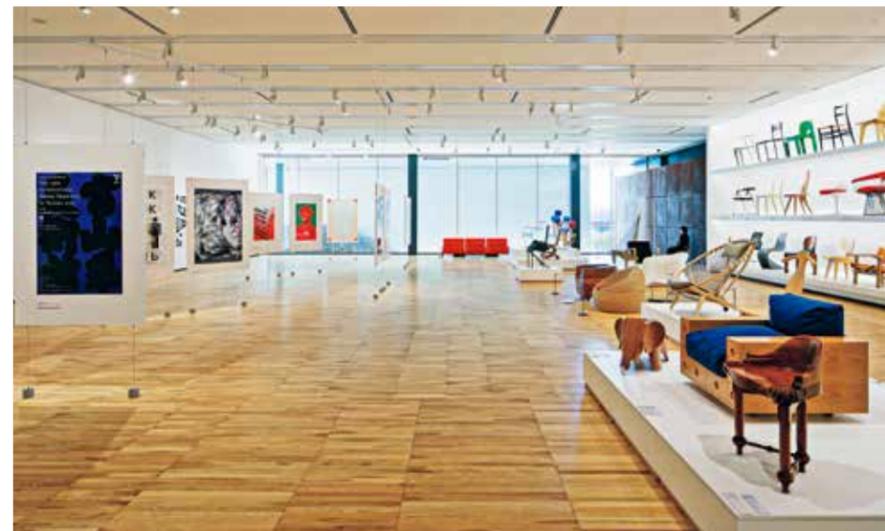
- 1 2階東側のホワイエは天井高が11m。天井にはアルミを一円硬貨のような質感に仕上げたものを使っている。アルミキャストの腰壁は断面がひょうたん形
- 2 東側の外観。環水公園に面するためファサードはガラス張りとし、眺望や一体感を得ている
- 3 3階のデザイン展示室。約1万4000枚のポスターや約230脚の椅子のコレクションの一部を展示する
- 4 3階の中央廊下から環水公園を見る



1



2



3



4

テーマ2

まちに広まるガラス・アート そのルーツは伝統の薬売りにあった

取材・文 | 磯達雄
写真 | 小松正樹(特記以外)

富山市には全国でも珍しい現代ガラス美術を展示するガラス美術館がある。これは市が進める「ガラスの街とやま」構想の集大成としてオープンしたものだ。なぜ「ガラスの街」なのか。そこには、日本中を歩いて置き薬を配置し、「先用後利」の方法で販売した、富山の薬売りの歴史が関係していた。市内にはそれに触れられる施設がいくつかある。文化から産業まで、富山発展の礎となった薬にまつわるスポットを巡ってみよう。

富山の中心市街を歩いていると、ところどころにガラスの展示ケースが置かれているのに気づく。中にはそれぞれにガラスの美術作品が置かれている。これは富山市が進めるまちづくり「ガラスの街とやま」の一環で設置されたものだ。この構想では、作家の育成や産業化の推進とともに、芸術文化の振興を目論んでいる。そのためにもまず設けられたのが、このストリートミュージアムだった。そして「ガラスの街とやま」の集大成として、2015(平成27)年、複合再開発施設の「TOYAMAキラリ」の中に富山市ガラス美術館がオープンする。

この美術館は、現代ガラス美術を収蔵する、全国でも珍しいガラスの美術館だ。最上階には「ガラス・アート・ガーデン」と名付けられた大規模なインスタレーションもあり、ガラス・アートの常設展示が充実している。

富山がなぜ「ガラスの街」になっていったのか。富山市ガラス美術館の富弥葵氏が疑問に答えてくれた。「薬を入れるガラス瓶づくりから始まった、と聞いています」。

なるほど、薬は富山で300年以上の伝統がある産業だ。その関連業者として、富山駅の周辺に10社以上の製瓶業者がいて、さまざまな色がついたガラスの小瓶を製造していたという。薬の容器はプラスチックに置き換わり、製瓶業者はいなくなりましたが、その流れの先に現在のガラスアートがあったのか。文化の基礎をつくっている薬の歴史に興味を湧き、富山にある薬の関連施設を巡ってみることにした。

「先用後利」の販売方法を解説 江戸中期に創建された 土蔵も展示室に

まずはTOYAMAキラリの近くにある池田屋安兵衛商店へ。1936(昭和11)年に創業した薬屋で、ナマコ壁の建物へ入ると、中には丸薬を製造する古い機械も置かれている。ここでは、さまざまな効能の和漢薬を買うことができるが、一番の主力商品は「反魂丹」だ。



3



4



5



6



7

「反魂丹」こそ、富山が売薬王国と言われるようになった、そもそのきっかけである。1690(元禄3)年、富山藩の二代藩主の前田正甫は、江戸城で急病になった大名を、懐にもっていた薬で救った。薬の効き目は知れ渡り、他の大名も自分の藩で販売することを頼むようになる。これにより、富山の薬の行商が始まったとの伝説もある。

富山の売薬は、置き薬という販売方法を採用していた。これは富山から出向いた販売員が、それぞれの家庭にさまざまな薬を預け、次に訪れた際に使われた薬の分だけ代金を徴収するという仕組みだ。この「先用後利」の販売方法も、富山の売薬が全国に広まった理由とされる。

富山市民俗民芸村にある売薬資料館では、富山の売薬業者が使った行商の行李や製薬の道具、薬のパッケージなどを展示している。販売員が配る紙風船などのオマケに、懐かしさを感じる人も多いだろう。企画展示を行っている別館は、富山を代表する売薬商だった密田家の土蔵だったもの。江戸時代中期に富山城下に建てられたもので、2001(平成13)年にこの場所へ移築された。往時の売薬商がいかに繁盛していたか、それがうかがえる遺構である。

唯一残る薬種商の店舗 富山の発展はここから始まった

富山市街に30軒ほどあったとされる薬種商の店舗は、1945(昭和20)年の富山大空襲でほとんどが焼

失してしまった。唯一、残っているのが、富山市東部の新庄にある「薬種商の館 金岡邸」だ。これが現在は、売薬に関する資料の展示施設として公開されている。

母屋は明治初期に建てられたもので、敷地内にある新屋、土蔵、塀、門を合わせて、国の登録有形文化財となっている。中に入ると壁を埋める大きな薬箆筒に目を奪われる。これは1860(万延元)年からあるものだという。奥には薬の原料や製造の道具などを展示するが、大正期に増築された豪壮な総ひのき造りの新屋部も含め、建物自体がまぎれなく引き継がれている。

展示室のひとつが金岡家の資料室になっており、そこで金岡家の業績を知ることになった。金岡家は江戸末期から薬種商を営んだが、それにとどまるものではなかった。初代・金岡又左衛門は、県会議長や衆議院議員を歴任。そして密田孝吉(売薬資料館別館の土蔵を建てた密田家の親族)から声をかけられ、電力事業にも取り組む。1899(明治32)年の大久保発電所をはじめとして多くの水力発電所を建設し、これにより生み出された豊富な電力に惹かれて、富山運河の周辺も含め、この地方には多くの工場が集まることとなる。その後も金岡家は、製薬、銀行、コンピュータなど、さまざまな業種の企業や、学校を設立して経営した。

富山県の産業基盤を中心となって築いた金岡家。その始まりが薬種商だった。それを考えれば、ガラス・アートにとどまらず、富山の文化や産業のルーツが、伝統の売薬から始まっているといえるのかもしれない。

3 「薬種商の館 金岡邸」。明治初期に建てられた薬種商の店舗。国の登録有形文化財。関連20ページ

4 富山市民俗民芸村にある売薬資料館の別館「旧密田家土蔵」。江戸時代中期に創建された売薬商の蔵を、約1年半の歳月をかけ移築・復元。調査・解体の際、富山大空襲時に受けた焼夷弾が屋根に刺さったまま発見されたほか、さまざまな災害をくり抜けてきたことが判明。床や天井の大きな一枚板、豪雪に耐える狭い柱間など、蔵建築としても見どころが多い。関連18ページ

5 池田屋安兵衛商店。富山城を中心に薬種商が多く集まった地域に、いまでもその姿を残す。建物は富山大空襲の翌年に、住居兼店舗・生薬倉庫として再建。一部改修をしているが、市街地で最も古い木造建築だ。店内では、「反魂丹」などの和漢薬を購入できる。関連19ページ

6-7 昭和初期から中頃にかけて製造された薬瓶【所蔵：富山県売薬資料館、写真提供：富山市ガラス美術館】

磯達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト/1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年日経アーキテクチャ編集部勤務。2002年-2020年3月フリックスタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

- 1 富山市ガラス美術館が入っている建物「TOYAMAキラリ」。外装にはガラス、アルミ、御影石の3種の素材が組み合わされている。関連2-3ページ [写真：石田篤]
- 2 城址公園前のストリートミュージアム。ケース内にガラス・アートを展示している



1



2

富山 建築めぐり

TOYAMA

参考

- ・「岩瀬まち歩きまっぶ」岩瀬カナル会館、2021.3
- ・国土交通省北陸地方整備局 立山砂防事務所「事業概要」2021
- ・白井芳樹「とやま土木物語」富山新聞社、2002
- ・富山県教育委員会編「とやま文化財百選シリーズ6：とやまの近代歴史遺産」富山県教育委員会 生涯学習課・文化財室、2010
- ・「富山市民プラザ30年史」富山市民プラザ、2020
- ・「とやまの姿」富山県経営管理部広報課、2020
- ・「富山の土木史と重要文化財富岩運河中島閘門」富山県土木部、1998.11
- ・文化庁 国指定文化財等データベース (<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index>) 2021.6.9アクセス

おことわり
04-21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2021年6月時点の施設名称を使用しています。



近年のビッグプロジェクトとして、隈研吾のガラス美術館＋図書館「TOYAMAキラリ」や内藤廣の「富山県美術館」が目された富山は、80年代以降、著名な現代建築がいくつも実現している。槇文彦の「富山市民プラザ」、池原義郎の「富山県総合福祉会館」、菊竹清訓の「富山県立山博物館」、CANの「高志の国文学館」、アルセッドの「富山県岩瀬スポーツ公園健康スポーツドーム」、立山まで足を延ばすと磯崎新、六角鬼丈の「富山県立山博物館」など話題の続いた地域だ。

これらの建築は、まちの成り立ちとともに知るとまた面白い。歴史的に富山は北前船の重要な寄港地だった。沿岸の岩瀬は歴史地区で、廻船問屋の古建築が保存されている。昭和期に入ると、商船経済の斜陽を見こして、工場誘致を行った。倉敷紡績の工場も建ち、

創業の大家家との縁も生まれた土地だ。富山は3,000m級の立山連峰から富山湾の深海1,000mまで、高低差4,000mの地勢。急流河川が昔から氾濫を繰り返し、まちづくりは治水とともにあった。その経済負担をまかなうために、発電事業を興し、運河を計画し、工業誘致を試みてきたのだ。富山の電力はアルミ生産にもつながり、建設業界とのつながりも生まれたであろう。歴史的商都としての自負があり、古いものを大切に守りながら、しかし良いものは積極的に採り入れる、合理的な気風のある土地柄でもある。治水問題を乗り越えてきた地域ならではのメンタリティが、まちづくりや建築のクオリティを上げるモチベーションとなっているのかもしれない。

写真 | 小松正樹(特記以外)



MAP 3 | 富山市周辺

- 富岩運河および富岩運河環水公園関連の建造物
- 売薬関連の建造物
- その他



MAP 2 | 岩瀬周辺

- 富山港展望台
- 富山岩瀬郵便局
- 願寺
- 森家土蔵群
- 富山港湾合同庁舎
- 富山信用金庫岩瀬支店
- 岩瀬カナル会館
- 岩瀬神社
- 岩瀬訪問神社
- 盛立寺
- 旧馬場家住宅
- 旧森家住宅
- 榎田酒造店

01

富山市売薬資料館

設計 | 仙田建築士事務所

竣工 | 1984年

富山市安養坊980

富山売薬の史資料が並ぶ資料館（写真は本館外観と別館内観）。「製薬の技術はごく一般的なものでした」と、兼子学芸員。「他の地域からお金を得るための産業であり、薬を安定的に届けながら文化や情報を各地から得て、それをまた各地へと調達する。売薬とは、人と物が行き交う交易だったのです。売薬商家・密田家より寄付された史資料には、売薬人と各藩との関係も記されており、単なる薬売りではない富山売薬の歴史がわかる



▶p.15参照

02

富山市 菅牛人記念美術館

設計 | 菊竹清訓建築設計事務所 竣工 | 1989年 富山市安養坊1000



富山県出身の水墨画家・菅牛人の住宅兼アトリエ跡地につくられた美術館。坂道に沿って計画された細長い本館から望む中庭には、菊竹がデザインを手がけた曲線を描いたベンチとグラフィックをまとった配電盤が並ぶ。竣工当時、住宅が隣接していたため入口にすりガラスの仕切り壁が設けられていたが、2021年に改修。富山駅構内のガラス壁面を手がけたガラス作家・名田谷隆平のもと、市内で活動するガラス作家らが協同制作。牛人が愛した呉羽山から見た立山連峰を表現した色鮮やかなガラスの壁画が迎える



03

富山県美術館

設計 | 内藤廣建築設計事務所

竣工 | 2017年

富山市木場町3-20

04

牛島開門

設計 | 不詳

竣工 | 1934年

復元 | 2002年

富山市木場町16-1

05

富山県富岩運河環水公園

基本デザイン | 環境デザイン研究所

竣工 | 1997年（一部開園）、2011年（全面開園）

富山市湊入船町

06

富山県民共生センター

設計 | 山下設計・富山県建築設計

監理協同組合JV

竣工 | 1997年

富山市湊入船町6-7

07

とやま自遊館

設計 | 山下設計・富山県建築設計

監理協同組合JV

竣工 | 1996年

富山市湊入船町9-1

08

富山市総合体育館

設計 | 山下設計

竣工 | 1999年

富山市湊入船町12-1

09

富山電気ビルディング本館・新館

設計 | 富永謙吉

竣工 | 1936年（本館）、1956年（新館）

富山市桜橋通り3-1

日本海電気（現・北陸電力）の本社、貸ビル、レストラン機能などを備えた富山県内初の鉄筋コンクリート造の複合オフィスビル。旧神通川の腐川地を運河掘削土砂で埋め立てた区画整理地に立ち、富山大空襲では5階を焼失したものの復旧。その後、進駐軍による接収を乗り越え、いまに至る。内装・外装ともに数多くの増改築が行われているが、御影石張りの玄関ポーチまわり、人研ぎの階段、漆喰天井のほか、一部に暖炉や進駐軍接収時の看板が残る。本館は内藤多仲の構造設計。国の登録有形文化財



10

富山県庁舎本館

設計 | 大熊喜邦 竣工 | 1935年 富山市新総曲輪1-7

旧神通川腐川埋立て地に計画された庁舎。知事がいまも執務を行う都道府県庁舎のなかで5番目に古い。設計は国会議事堂の建設に携わった大熊喜邦。大理石の階段手すり、3層吹き抜けの階段まわりなど、威厳がありながら開放的な空間をもつ。富山の都市計画事業をいまに伝え、戦前の富山市街地の近代化を象徴する建築だ。大通りの向かいには、三角形の屋根が特徴の富山市庁舎（日本設計、1992）が立つ。こちらは大屋根の下に8層吹き抜けの大空間をもち、地上70mには展望塔が設けられている。県庁舎は国の登録有形文化財。昭和、平成、2つの庁舎建築を巡ってみよう



11

富山県総合福祉会館

設計 | 池原義郎・建築設計事務所 竣工 | 1999年

富山市安住町5-21

富山県庁前から、まちに目を転じるとガラス張りの建物が目にとまる。地域総合福祉の拠点として県が建設し、「サンシップとやま」の愛称がついた施設だ。設計者は指名コンペで選ばれ、「福祉の船出」と、かつての「舟橋」という地名から船をイメージしたデザインとなっている。社会福祉活動の公的拠点と福祉活動者の養成・教育という異なる機能を低層と高層に分節。中央の明るく大きなアトリウム空間が両者をつなく、内部のガラスと鉄骨のディテールも美しい。第31回富山県建築賞受賞



12

高志の国文学館

設計 | CAn 竣工 | 2012年 富山市舟橋南町2-22

旧県知事公館を改修し、展示棟を増築。市民に開かれた文学館として再生した施設。設計者は、旧県知事公館を「屋敷」、増築棟をそれに付随する「蔵」（閉鎖的な空間）と「土間」（開放的な空間）と位置付け、必要な機能やボリュームを周辺環境に合わせて配置。大型ペアガラスを採用したライブラリーからは、庭園が1枚の絵のように望める。「蔵」の内装のアルミ鋳物パネルには、15種類の植物の葉がランダムに鋳込まれており、1つとして同じものはない。第57回BCS賞ほか受賞



13

富山市民プラザ

設計 | 横総設計事務所 竣工 | 1989年

富山市大手町6-14

富山市政100周年事業の一環で、市中心部の活性化を担う中核施設としてつくられた複合文化施設。音楽用ホールや市民学習センターなど、公共・民間の多種多様な施設を内包する。「複合施設がまだ珍しい時代に官民共同出資で計画した建物です。市民の財産として予防保全に力を入れました」（富山市民プラザ・中屋チーフ）。積極的な自主イベント開催といったソフト面の取組みに加え、照明のLED化など時代に応じた改修を行いつつ、設計者・関係者が連携し建物のデザイン性を維持。市民に愛される施設だ。第32回BCS賞ほか受賞



14

グランドプラザ

設計 | 日本設計

竣工 | 2007年

富山市総曲輪3-8-39



富山市中心部の繁華街に立つ、ガラスの大屋根がついた全天候型の多目的広場。隣接する立体駐車場と商業施設の市街地再開発事業と一体的に計画することで誕生した。建物にかかる水平荷重を隣接する建物に負担させて、柱・梁などの構造体に軽快さを生み出している。2019年には運営主体の「まちづくりとやま」が、富山市民プラザの運営主体「株式会社富山市民プラザ」と合併。中心市街地全体のさらなるにぎわい創出が進む。2008年富山県建築賞ほか受賞

15

TOYAMAキラリ

設計 | RIA・隈研吾・三四五設計共同体

竣工 | 2015年 富山市西町5-1

▶p.02-03, p.14参照

16

池田屋安兵衛商店

設計 | 不詳 改修設計 | スタジオDuo

竣工 | 1946年 改修 | 1990年

富山市堤町通り1-3-5

天井を取り払い、吹き抜けとした店内（写真左）。左手奥の調剤室には、200種以上の生薬を収めた薬棚が置かれており、症状や体質に合わせて調剤する「座売り」がいまも行われている。作業所だった2階は、薬膳料理を提供するレストランに改修（写真右）。天井には、全焼後、建物を再建する際、能登の農家から譲り受けた立派な梁が渡る



17

DINING & CAFE 奥音

設計 | 隈研吾建築都市設計事務所

竣工 | 2011年 富山市呉羽町2247-3

紡績工場跡地に計画された、公園と芸術文化活動の場が複合した富山舞台芸術パーク内に立つカフェレストラン。設計者が「木を〈組む〉のではなく、〈積む〉ことによって、森のような建築を作りたいと考えた」（設計者ウェブサイト）と語るように、105mm角の木材を積み上げてつくられた建築は、解体・再組立て可能。見る角度、日の光によって建物のボリュームや表情が変わる。屋根は折板の上に、多孔質の発泡セラミックス素材を載せて緑化を施し、空調負荷低減を図っている



19

富山県岩瀬スポーツ公園

健康スポーツドーム

設計 | アルセッド建築研究所・

富山県建築設計監理協同組合

竣工 | 1992年

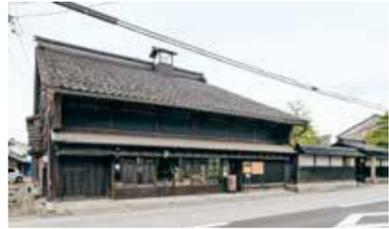
富山市森5-1-17



富山湾に近いスポーツ公園内に立つ、テニスコートを2面収容した膜構造のドーム施設。膜屋根には、テフロン樹脂コーティングガラス繊維織布が使われており、晴天率が低く、冬場の海風が強い富山の地にあっても、膜の光拡散効果によって明るく安定した室内環境を提供している。印象的な16角錐の跳ね上がった膜屋根の形は、積もった雪を左右に落とすため、ドーム天井の大断面集材材を用いた16本の登り梁も美しい。第25回富山県建築賞受賞

薬種商の館 金岡邸 (富山県民会館分館)
 設計 | 不詳
 竣工 | 明治初期 (母屋)、大正期 (新屋)
 富山市新庄町1-5-24

薬種商時代の資本を元に、金融機関をはじめ広い分野に投資し、富山県の産業育成に大きく貢献した金岡家。母屋は、薬種商店舗の往時の姿をいまに伝える。迎賓館として増築された新屋は、豪壮な総ひのき造りで、銘木や折上げ天井の座敷など、格調高い意匠が見どころだ。母屋・新屋・土蔵・塀および門は、国の登録有形文化財



**富山市福沢地区
コミュニティセンター**
 設計 | 戸尾任宏・建築研究所アーキヴィジョン
 竣工 | 2001年
 富山市東福沢3550

周辺の教育施設と地域の人々の交流拠点として、地区と行政、設計者の密なコミュニケーションによって完成した施設。黒い杉板の壁を抜けると、トップライトが設けられた廊下を中心に、西側に事務室などのサービス施設、東側にロビーやホールなどの主要施設が配されており、開放的なロビーには緑側のようなテラスが広がる。家具は小泉誠のデザインで、地元の家具メーカーが制作。アートイベントの拠点施設としても活用されている。第34回中部建築賞、第10回公共建築賞優秀賞ほか受賞



常願寺川砂防施設 (本宮堰堤)
 設計 | 蒲孚 竣工 | 1936年 富山市本宮～中新川郡立山町芦峯寺



常願寺川水源部の巨大なくぼ地「立山カルデラ」内には、安政の大地震による崩壊土砂が約2億㎡残るといわれ、その流出土砂が原因で、常願寺川は洪水・氾濫を繰り返す「日本一の暴れ川」と呼ばれていた。これを治めるため、県、そして国の直轄事業として引き継がれ完成した砂防施設。不安定な土砂をカルデラの出口で抑え込む「白岩堰堤」(写真左、設計指導：赤木正雄)、カルデラ内の土砂の動きを抑える「泥谷堰堤」(写真右、設計指導：赤木正雄)、そして常願寺川中流部の「本宮堰堤」(写真下)は、土砂を一度貯め、下流へ穏やかに流す役目をもつ。修景計画も見事な本宮砂防堰堤は、間近に見学可能だ。3堰堤は常願寺川砂防施設として国の重要文化財 [写真左上2点提供：国土交通省 北陸地方整備局 立山砂防事務所]



笹津橋

設計 | 高野務 竣工 | 1941年 富山市笹津～西笹津
 神通川に架かる、現存する戦前の橋としては全国で2番目にスパンが大きいアーチ橋。周辺環境と調和した橋の設計は、富山県土木課の若手技師・高野務が手がけた。高野は、東京帝国大学工学部土木工学科を卒業後、富山県土木課に勤務。のちに建設技監、土木学会会長を務めた人物。地域の暮らしや産業を支えてきた橋は、上流に新笹津橋が開通したことにより、現在は歩道橋として地域の人々に親しまれている。国の登録有形文化財



**富山県 立山博物館
展示館・遙望館・まんだら遊苑**

設計 | 磯崎新アトリエ (展示館・遙望館)、六角鬼丈計画工房 (まんだら遊苑)
 竣工 | 1991年 (展示館・遙望館)、1995年 (まんだら遊苑)
 中新川郡立山町芦峯寺93-1
 立山信仰の拠点集落の一つで、その特徴を描いた立山曼荼羅の発祥地である立山連峰の玄関口・芦峯寺(あしくらじ)に広がる、立山の歴史と立山信仰、立山の自然を紹介する広域分散型の博物館。教界・聖界・遊界と名付けられた3つのゾーンで構成されており、「雪の大谷」をイメージした白い漆喰塗りの螺旋階段をもつ「展示館」(写真下2点)、映像ホール「遙望館」、立山曼荼羅の世界をランドスケープと建築、さらに光・音・香りを含めて表現した「まんだら遊苑」(写真上2点)が配置されている。圧倒的な景色とともに楽しみたい



東山円筒分水槽

設計 | 不詳
 竣工 | 1954年
 魚津市東山地内
 水田の一角に、ゆうゆうと水を湧き出しつづける円筒状の構造物がある。片貝川流域の水争い解消を目的に、農業用水を正確に一定の割合で配分するために設けられた農業土木施設だ。片貝川左岸の貝田新円筒分水槽で右岸と左岸に分水。サイフォンの原理を使って片貝川の下を通し、右岸のこの東山円筒分水槽へと水を導き、ここで3方向へ公平に分配する。完成から50年以上経ったいまも、安定した用水の供給を果たす現役の土木施設だ。円筒状の構造物の中央部から水が湧き出て外周部に越流する様は、時を忘れて見入る美しさだ。国の登録有形文化財



沙石

設計 | 道下樹デザイン事務所
 竣工 | 2019年
 富山市東岩瀬大町93
 100年以上の歴史をもつ蔵元・樹田酒造店が運営する有料試飲スペース。「岩瀬五大家」のひとつ廻船問屋・宮城家の母屋を再生した店舗では、約100種類の満寿泉が味わえる。元の欄間や神棚を用いつつ、銘木や建具の細部までディテールを詰めた美しい空間の中心には、井波別院瑞泉寺の境内で落雷を受けた大きな杉がそびえる。本堂を火災から救ったこの木を、厄除けの願いも込めて柱とした。同じ棟には日本料理店、敷地内にはイタリア料理店が店を構え、裏手に並ぶ蔵は貸しスペースとなっている。力強さに満ちた庭、北陸本線の枕木を用いた鳥居が、敷地を一体的につなぐ



旧馬場家住宅

設計 | 不詳 竣工 | 明治初期
 富山市東岩瀬町107-2
 江戸後期から活躍した北前船主・廻船問屋「馬場家」。「岩瀬五大家」の筆頭に挙げられ、北陸の「五大北前船主」のひとつにも数えられる。天窓から光が降り注ぐ長さ約30mのトオリニワ、その横に広がる33畳のオイ(広間)、継手のない檜目材を使った上り框も圧巻だ。建築家・吉田鉄郎とも関係が深く、馬場家の邸宅も数多く設計した。馬場家9代当主・道久の妻・はるは、旧制富山高等学校設立のために多額の寄附をするなど教育の発展にも尽力した。国の登録有形文化財



旧森家住宅

設計 | 不詳 竣工 | 1878年ころ
 富山市東岩瀬町108
 「岩瀬五大家」のひとつ「森家」。東岩瀬は、1873年に大火に見舞われ1千戸のうち650戸が焼失。有力な廻船問屋は、豊富な財力をもって復興・再建に取り掛かり、当時の建築様式を引き継ぐ家屋が再建され、それが現在のまちなみを形づくっている。森家は、ムクリのついたコケラ葺きの庇とスムシコ(竹の籐の格子)をもつ、独特な東岩瀬廻船問屋型町家の典型だ。「商売繁盛」にかけて上座の畳を半畳にしたオイ(広間)や、左官職人・竹内勘吉が手がけた土蔵の鏝絵も見どころだ。国の重要文化財



富山港展望台
 設計 | 富山県建築設計
 監理協同組合
 竣工 | 1985年
 富山市東岩瀬町海岸通り